佳作

人のために行動できる人に

群馬県　太田市立沢野小学校六年　辻本　秀幸

五年生の時、道徳の授業で『稲むらの火』を学習しました。ぼくは、その授業の時に「こんなに優しい人がいるんだ」と思っていました。この時はあまり詳しくわかりませんでした。だけど、今から半年前におじいちゃんが中学時代の同窓会に出かけていきました。それは、和歌山県広川町でした。そうです。『稲むらの火』のぶ台となっていた広村です。ぼくはおじいちゃんに、いろいろな話を聞きました。

「梧陵さんが、助けようとしたんだよ。」

「自分の家の稲むらに火をつけたんだよ。」

「それが目印になって、八幡様に逃げることができたんだよ。」

自分のものに火をつけて、みんなを助けようとしたということに驚きました。でも、こんなに優しい人がいたから、助かった人がいるということ、津波の恐ろしさを伝えることができていることがわかりました。

僕が生まれる前の平成二十三年三月十一日。東日本大震災が発生しました。「釜石の奇跡」と呼ばれた避難は、今までの津波を経験した人たちが伝え残してくれたことが生かされているそうです。命を落としてしまう人や家や物が流されてしまう人がいます。津波は恐ろしいです。だから、正しく知識を身につけておくことが大切だと思います。

この夏、和歌山県に行ってきました。おじいちゃんが話していた『稲むらの火』について、自分で確かめてみたかったからです。広川町には「稲むらの火の館」という資料館がありました。地震や津波に関する資料がたくさん展示されていました。避難を促す映画も見ました。濱口梧陵という人が、日ごろから避難訓練をしていたことがわかりました。津波に気付いていない村の人達を高台へ避難させるために、家の周りにつんであった稲むらに火を付けて、家が火事になっていると見せかけて、村の人を呼び寄せ避難させました。それに、食料のない人たちに、自分の倉にあった米を分けたことがわかりました。みんながこの町を出ていかないように、堤防を作る仕事を与えて、梧陵さんは賃金をはらいました。欲に目がくらんでしまう人、自分のことしか考えない人も多いと思います。その中で、梧陵さんのように、人のために行動できる人がいることに感動しました。

広村堤防、八幡宮も見学してきました。僕が勉強したことを多くの人に伝えたいと思いました。本当の恐ろしさを知る人が伝えてくれるから、命が助かる人がいるのだと思います。教科書にのるくらい有名な話ですが、本当のこわさを知らないといけないと思います。

和歌山県に行って、濱口梧陵さんのことをよく知って、とてもよかったです。これから、人のためになる行動ができる人になれるように、がんばっていきたいと思います。